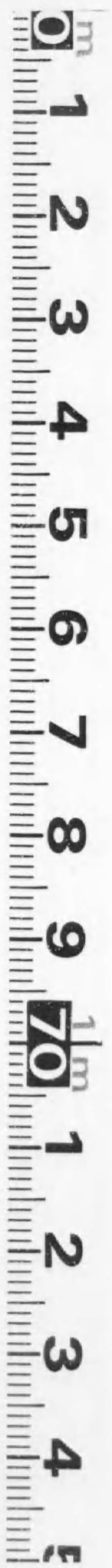


始



培心集



特

特109
214

培
心
子
子



わが心の友に贈る

目次

くちぶね……………一

片戀……………二

野の入日……………三

赤き地平……………六一

うそみぞれ……………八七

いかにぞや汝、父に憎まれたるか、
母にうさまれたるか、父は汝を
憎むにあらじ、母は汝をうさむに
あらじ、
たゞ是天にして、汝の性の

拙なきを泣け、

—野 晒 紀 行—

くちぶね

肩揚げのそれしさびしさ川沿ひの柳により
て口笛を吹く

この頃は日記もつけをかりにけりかなしき
ことの胸にあまれば

父親に向ふまべては沈黙の外しらぬこそわ
びしかりけれ

世をすねてさびしき心歌にやるかたわある
子がかあきいのち

枯柳ならぶ河原に死をたもふかたわなる子
に秋の風ふく

君が帯しごけばかあしき音をたつる秋ゆく
朝はさびしかりけり

姉ひとり嫁ぎしゆるゑに初冬の朝餉の膳はさ
びしありけり

いさゝかのことにて母の詫びしゆるゑ心さび
しく夕餉をるゑも

我れも柴刈るたほよそびとく白日に涙をが
して我れも柴刈る

柴刈るとわれらうちある鎌の刃に秋の陽映
えて眼にいたきかな

雪おさし草屋根づらを夕餉たく煙さびしく
這ひめぐるかゝ

おしだまり親子五人が板敷に茶漬をまゝる
冬の朝かな

寝がへれば裏の畑に狐鳴くとのもは雪の降
りつむけはひ

わたかたに柳なるべしたよりあげにあよあ
よたてり雪しきり降る

一列に尖りたる木ぞ並びたる長き野道を葬
列のゆく

番僧が鼻赤うして枕經よみにきたれりかは
たれごきを

立枯の林の中に兄の墓しらぐたてり入日
の赤さ

絹羽織ぬぎまて泣きぬ不具の子のたれゆる
あはれよそほふべけむ

春たゞば母をたづねて巡禮のあてなき旅に
さまよひいでむ

ゆきゆるば我が安住の國あらむ山の彼方の
うまがまむ空

片

戀

片戀の身のせつなさは蒲公英の穂を吹き
らし泣きにけるかも

殊更に裏道まはる我がさがをかたわなれば
とは誰ゐいひけむ

母の墓まもりてたてる裸木も春さりくれば
もえいでにけり

祭の日嫁えらみまど橋の上に興之吉たてり
彼もいきまもの (興之吉者白痴也)

晝すぎを炬燵蒲團に顔うづめかにをたもふ
ぞやもめの姉よ

かにごとぞ物置小屋のものゝげに姉がしく
く泣いてゐたりき

ぬしのあき女の結ひし丸鬘はさびしかりけ
り山吹の花

子には子の父には父の生きやうにあはれこ
としの春もいぬめり

かたわある身のせつあさは火のごとき戀も
たさへてさびしくも生く

かたわなるわれゆる途にひとり身ぞなごい
ひ乳母を泣あせけるかな

*
 かたわなれば怒りりもゆる心をもしづにお
 さへてかへりこしかも

かたわの子いやいととて祖母はわが夏着
 を織るといそがしきあか

ふと鍬をたくまもあらむわがこころひたひ
 た君にはしるかりけり

疲るれば彼の水色の連山を眺めて君をおも
 ふかりけり

おとあしくゐの山かげの母の許に糸ひいて
 ゐむかゝはりもあし

夏の夜も錆びたるペンをはしらをるさびし
 き心なにくたとへむ

そのかみの日記いだきて焼きに來しこの裏
 山の紅つゝじはも

戀たなあくば生けるかひなしえりさへいとし
 女なをもてるならずや

かたわある身を忍ぶればもえさあるこの戀
さへもひとにはつげせ

かたわなる子に戀はるゝとひとづてに君さ
かばいかにかなしかるらむ

かぐさまぬわがこのごろのこもりゐを戀も
まゐるやと姉はいたみき

くちあしの弟を負いて泣きにしし岬のはて
に旗なれりけり

うれしさのきはまりて我れ眞裸に焼砂原を
ひた走りけり

かたわなる我がたもふ子に神よ永久こはに戀て
ふことを知らしむなゆめ

ひと戀ふる心のひまに裏畑にいづれば豆の
葉に日光ひがながれるし

くちあしの四郎とわれと燈籠のかけにさび
しく踊見てしか

夜をこめて踊太鼓が鳴ればとてあはりも
あき^{いのち}生命なりけり

かたわあるわれと眞晝の街あゆむ姉はさそ
がにかあしからむぞ

はしなくも君が秘密を知りえたるこのかあ
しみをいかにまべけむ

あゝいかに老ひし山羊にも似たらずや次席
訓導原田弘道

秋の風さやゐに吹けば姉は姉はわれはわれ
あるもの思ひかな

あかしきはめしひ盲興市が秋の夜を耳かたむけて
雨を聴くさま

夕日あかく窓にもゆれば姉とわれそがひに
ありて悲しみにけり

亡き兄の仕立をほしの羽織着て街ゆくわれ
に秋の風ふく

かたわふれば世にはしたなき製糸場の工女
らにさへあまごられけれ

父よいに君が邪淫のむくひにて永久とこほに
あしきとらはれの身ぞ

みはるかま羽後連山に雪光りわが世うれし
き冬は來にけり

冬の朝ふとうつし見る姿見のこれが我が身
か戦慄おぼゆ (病みて)

ふたゝびは見せと鏡のまへをさり泣かまほ
しさに裏畑にいづ

泣きたさに來し裏畑の冬の朝若葉きやべつ
に日光ひがながれぬし

野の入日

この心なによたよりてやまからむ野に草し
けばとほく入日を

人妻をみおくりたてる秋の路あはれ不覺に
たつる涙を

狂ふしく髪をさむしりかの丘の夕陽ひを抱ゑ
むとひた走りけり

こうくたねと梢たねならして夜半なれや嵐さかま
き襲ひ來しかも

夜をこめて風見のさしりさびしみつ冷ひし
小床にひとりかも寝る

熟柿うれがきの屋根うつ音かふとめざめめざめて聞
ける遠き海鳴

いまは寝むと小夜着かつげば狐鳴く思ひば
 なんぞあぢきあき世ぞ

ふとさむればいまだ灯あかき隣室のはなし
 は我れにあはるらしも

じつと我れを見てゐしがまた思ひ入る父も
 かゑしや夜を啼く野鴨

かくしもついたみにわれらあひふれをあた
 みにかはすあはれみのまみ

樹に倚れば冬の光線ひたそくぐわれ眼まなぶとち
指くみにけり

かへらむと杯おけばふとうかぶかの監房の
ととき寢室

雲まる板谷峠の夜を寒みひとり娘みあればは
やい寐つらむ

小さき姪を膝に抱きつ恍惚とたぎる湯をき
く小夜ふあみかも

悲しきは北方越後冬の午後の石屋根の上の
まづしき太陽

かぐろきは楊なるべし野の一樹木肌あらは
に雨にぬれたる

曉あけの雨しろうけふれるどろ並樹雨にぬれつ
と鴉からが啼けり

露霜をふみて大根を掘ると來しだんぐ畑
のあさあけの月

羽切りし雁が来て啼くやるせなさまして越
後の曇り日の午後

ふらり來し冬の茅原に野馬ゐてしたしき腫
もてわれにより來くも

笹やれど喰まき野馬はとろむ腫にわれをみ
つむる眞晝野の道

うれしくもひとりの姉にあはむ日の梅咲く
頃のとほくもあるゐな

病室に姉がランプをつけしより涙みせじと
寐がへりにけれ

起きむとしてにぎるベットの鐵の冷心はと
ほく君に走れり

いやひさに空の蒼きにしたしむと丘の斜面
を這ひのぼるあれ

水あさぎ空はろくしうち仰ぎみはる眼まなみに
涙にじみ來く

死にてゆく伯父のかたへに男あれば従兄は
眼とちてゐたるも

夜伽まる柩のまへを黒き猫のつそりとゆき
ぬその眼はひあり

寺男ふと淡曇る空仰ぎ朱の天盖をかざした
るかも

金色に光りきはまる夕山に柩しづくくと入
りにけるかも

甥あればまづ鉄とりて一塊ひとくわの土を柩ひこにかけ
まつりけり

この夜更けほつかりあかき電燈のもとに忘
念のわれありにけり

あやまちて我が眞實をかたりけりあくてや
君にそむかれにけり

世のつねの女ごころと知りしより早寐はやねまゐる
子とありにけらしな

女てふものに別れしうら安さ白木蓮の花咲
きにけり

あはれかれかくあるいのちゐねて期おしわれ
にゆるせし年上のひと

やゝ口をゆがめてものをいふくせもいとし
るもける女なりしかあ

眺めやるさつき空ゆくひとつ鳥鳥がゆくへ
の青き八重山

遇ふまじき女ひまに遇ひけり横町の土塚のかげ
の赤き草の實

ジキタリスあの日の色に咲きたれどゐとか
たもなき戀路なりけり

親がよりあはれ十九の夏ふけて鳳仙花はや
實となりにけり

いとせめて穢多が娘のうまあさけるたみに
生きむ世は秋に入る

ものいはぬわがまくものをなかにして弟姉
父母あげきままかも

電線のきはまるところいつゝたぞ風せうせ
うとわたる夕空

さやくと夜の梢たねを風わたりひしとわが身
を抱きけるかも

きはまれる悲しみ抱きよりそへる槐の木肌
つれなかりけり

このまゝに越後の山の土とあるせんまへも
あゝ若さありけり

朝寒みたといくと呼ぶ聲の街を走りてわ
がめざめけれ

頬いたづらに生ひしうはひげかいなでつ今
朝姿見に秋をさびしむ

おとあしく繼母まははの子を妻とせる彼もあなし
き男あるあな

朱^{あか}ふりて雞頭の莖ほそりゆく君二十五の秋
を嫁がす

片戀のいまはつゝれし秋更けに嫁がぬ君を
かなしみにけり

雞頭畑老^は母と^かたれば^あ嫂の眼がけはしくこ
ちら見てゐたるも

夕日赤し雞頭畑に疲れたる眼をとちて横は
る犬

晝くらみ雨ふる峽の小驛に馬車屋のラツバ
鳴れるあはれさ

ひつそりとしまひ湯に来て身をひたしわが
ゆくまゑを思ひるにけり

死におくれこの流し場に鳴く虫とけじめわ
かたぬ我がいのちなり

しみぐと浴槽ゆかにひたり指くめば即ち我が
身み佛ぶつありけり

うつし世に生きのこりたる心地して峽の湯
宿にきく秋の雨

眼をつぶり樹肌によりぬおもふべくあまり
にしげき檜落葉あも

赤き地平

雪國の赤き地平の朝あけに鴉啼くあり悲し
きものゝ

満目の雪の冬田に白鷄しろかひの鷄冠こかむかゞやき唯に
赤しも

雪もよひの空に頸延^のし啼く家鴨群れゐて足
の赤きがとあし

小提灯手さげし母によりそひてもらひ湯に
ゆく寒夜ありけり

しんくくと雪つもるらし夜をめぐめ小指^をつ
めたくマチかいさぐる

ふところ手かへる夕戸にたつ母にあはれ告
ぐべきことばあらぬかあ

さびしさに夕戸をくれば向ふ家の女もさむ
き顔いだしけれ

疾風はやちか來るそのひととさのしつもりに警戒燈
ぞ赤ありしかあ

夜の疾風山脈やまなみ低うひそまりて警戒燈ぞほつ
ちり赤し

向ふ山白映えければかたへ山いよくく
くたそがれにけり

なげきつゝわがなげやりの部屋内へやうちをとりか
たづくる母のうしろかげ

そのようにさびしき顔をして居れば客ひきは來来
ずよと母はいひけり

ひかあれば老母ははが假着かりぎの袖口の赤きもひと
はわらはざりけり

赤淺し山やまうごの芽こゝろのうも赤み寸ほどのびて
泡雪うたげのふる

海苔焼けばほのかに磯の香の匂ふ春の午後
こそわりなかりけれ

春暮るゝ遠山寺の鐘の音にふれてさくらの
ちりもそめしか

サフランは赤し夕べの祈りもるわがゐたは
らにサフランは赤し

眼をどぢてあらむ常世つねよの春の花くれなるも
えて身は堪へがたし

夕ざれば柞の森に啼く鶉君に思ひのはせぬ
日はあし

さみだれの晝の伽藍のなで佛さびしくて我
がなでくみしかな

さつき雨さめく降れば乳房もつ佛の像を
うら戀ひにけり

あな尊と大日如來額づけばわがかをしみは
あどやさにけり

春の夜の枕の灯こゝしあきわげて御經を誦よもうら
はかあさに

大悲閣に佛いまさず山ざくら咲きてかつ散
る如意山の北(如意山乙寶寺觀音堂新四國第一番御札所也)

尊としやうき世の北の山ざくら佛の國は寂
しきものゝ(境内に蓮蕉の句碑あり)
つゝましく觀音堂にぬかづける順禮の背に
さそ夕日あか

更衣兄のふたみをわれにきせあな裾長とい
ひし母はも

仕立あげし單衣を母はわれにきせしはしと
部屋をあゆませしかも

さみしさに葱の菫みてありければ母も来て
たつ裏畑の暮

父の吐息我れのいのちをたびえしむ闇をふ
くみてダリヤは赤し

むまばれし心あなしみ戸をいで庭の若葉
に顔よせにけり

きくわけてたれしうかじのいちらしさおと
あしき娘はかなしかりけり

さみしらに芙蓉の在にみいるとき父はかひ
あき子とおぼせらむ

あがらふる狭霧のひまゆほのくと群青の
山みせる朝あけ

雞頭畑夕たつ姉にはした女のなにみそあご
 といひよるらしも

生なま乾ほしの泥人形をあらべたる埴は師しが路次を
 とほるうまれ日

ふとあかた屋根あひの空焼くるみて帳場格
 子のかげにあげくも

あざけりのあかに身を守りいさゝらの心お
 ごりにみづゐらは生く

黒襦子の襟あきあはせコスモスの白きにみ
 いる女ひまのあはれさ

この夜更けさ霧にぬれてほとくと我が家
 の裏戸たよくはあさ

子は母を母は子を思ふい寐がての枕のした
 に鳴きほそる虫

しくりくゝ氣やみの姉のかたはらにかにを
 泣く子どものほしきにや

秋ざくら咲くやさびしき井戸端にやもめの
姉のもの洗ひをり

近つ峯をに雪ふりければ金柑の實はさびしら
にひかりいでけれ

近つ峯に雪ふりければいそくと我が冬衣
縫ひまをる母

きみ病むとかあしき心ゐたむけてしら菊の
花にみいるありけり

柿の種子^た腹に生ふると泣きてけむそのかみ
のひといまはあらずも

小學の一年生の猿袴わきて愛^{かな}しも初雪の朝

穢多の子は穢多の子としてあそび居れ小學
校の廣庭の隅

男たち雪おろしまる大屋根の上の夕空風焼
けにけり

うすみぞれ

いちめんの雪の冬田の遠見えて鶴とる子の
ぼつちりくろし

うもみぞれものあぢけなき夕まけてしくし
くと齒のいたみいづるも

この夜更けめざめてあれば下駄あらし凍て
し大路をゆくは誰ぞも

あらしひて姉早寐たる爐にさむくたのれ不
覺におとを涙か

市路ゆく越後少女は紺足袋をいまだもぬが
を梅咲きにけり

日没は伽藍をこめて朱にけぶり鐘いんく
と鳴り出でにけり

あるときは器けにもられたる白き飯みつめて
涙なみあがしむたりけり

ゆくりあくわれらうちあひ酒くみね信濃川
瀬の音も更まけながら (以下新潟にて)

つれられて君が下宿をおとあひし營所通の
春のゆふぐれ

ほろ酔の君がうれし眼ほのぐと女をかた
る春の浅宵

かふしければ女は見じと春の夜の灯にそむ
きたる我れの手枕

酒のみて忘るゝほどのあかしみをもつひと
あらばうれしあらまし

ボイラーの赤くあぶやく初夏の大川の邊の
柳青しも

路次口に夕さりさむくたゝづむは工場がへ
りの父を持つ子か

窓ごしに見ゆる青空輸送車にけふもひある
 と身のさびしさよ

曉のさ青さもとに病室の白き建物たてるう
 れしさ

たち別れいまはとほくへかへる身につよく
 あれよと君のらしけり

おとがひをえりにうつめて病む姉がみやる
 庭べにちる桐の花

さみだれは津葉路の葉にふりそゝぎたがひ蠶飼づ
 ゐれの女ひこのうたゝ寐

さつき雨くさり卵をゐほ抱くかんどり牝雞の眼のい
 たくしけれ

若葉あげ赤きたまきのかたはづしたがひ蠶飼少女
 のわれに禮いっをも

不肖の子なればかゝしく手をつがね父が冷
 語もさゝし夏の夜

若桑のさやぎしづもり晝ふらし戸ざせるは
 蠶の眠る家かも

さみしき眸もてる子ゆるにまゝ子ゆるにい
 ぢらしくありてわがいだけども

かゝしみをわが身ひとつにうち黙く生ける
 は寂し夕ぐれの空

つゝましくわがかなしみに葉をたると心の
 まへのぬれし草も

われゆるゑにかゝしくたはを母がため秋咲く
花を培ひにけり

*

*

*

*

*

散る花もあはたどしげにあきふごの賣りに
いそぐもさびし徂く春

かたまりてこぼれし麥の芽ふくところ春の
陽そこにかがれたりけり

空青し地にもゆるものみを青しさびしきい
のちいづちのがれむ

黄あるランプけし忘れたる曉の枕にともり
さめにけるあも

ほそり指われとみいりつおもふこと朝の風
床のはゐなさにゐて

氣まぐれにうたひいでけるはやり唄かなし
 き唄を母にさゝれし

ありし日のかゝるかそけき思ひ出にほゝえ
 みていざ墓へいそがむ

氣まぐれにうたひいでけるはやり唄かあし
 き唄を母にきかれし

ありし日のかゝるゐそけき思ひ出にほゝえ
 みていざ墓へいそがむ

ほろくくと牡丹くづるゝ宵浅みさびしけれ
 ども堪へてゐにけり

我が腕^{かひな}牡丹ぞ眠るうも紅の頬よこの兒のい
 とほしきかも

浅川の草のしげみにこもり咲く姫燕子花色
 ふかみかも

たもふ子をはるかにおけば姫燕子^{かき}花草にま
 じりて咲くをかあしめ

姫燕子^{かき}花^つひそかにさける浅川の岸にあゆみ
をとめにけるかも

ほろくど山鳩鳴けばさびしけに眼をよま
るひとにもものいひやらむ

馬鈴薯の花さかりたる裏畑の晝ふかうして
閑古鳥鳴く

呼子鳥かのみちのくの山深くこもらふひと
に涙あらまな

夜とあればゐの街角にほつちりともる電
氣をかなしみにけり

大正二年七月より九年五月まで

培ふ花
なほり

大正九年九月二十一日印刷
大正九年九月二十一日發行

「非賣品」

不許
複製

新潟縣北蒲原郡乙村大字乙
著作者 久世杜茂吉
新潟縣北蒲原郡新發田町字下町七番戶
印刷者 田村泰藏

印刷所

新潟縣北蒲原郡新發田町字下町七番戶
田村活版印刷所

1871
H. P. H.

終

